

龍  
鳥

峰



4月号

第3卷 第4号

通卷 第22号

# 鷺峰目次 四月号

卷頭の言葉

人間讃歌願生の人

近藤達也

4

自我偈講義 久遠の本仏と人間釈尊・その六

提婆達多に対した釈尊の人間観の中に

日高白象

6

インドへ渡つた

身延山釈尊像の由来 その二

日高白象

18

白

炎

西沢 純

29

仏語解釈  
娑婆即寂光

藤原成憲

30

醒悟園本妙庵

糸尊像の入仏式

編集部

身延山青年行学講習会に参加して

小谷宣行

39

身延山学園児童研究部

秋田県下巡回布教紀行

小田泰博

43

糸尊像写真の頒布

鷲峰贊助会員に贈る

編集後記

48 42 28

表紙題字……身延山法主藤井日静猊下  
表紙写真……インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の糸尊像  
表紙印刷……大阪東洋印刷社長藤原秀憲氏寄進  
カット……みのぶ教報提供

# 願 生 の 人

それは今よりおよそ三千年昔の四月八日のことでした。西北インドの小さな共和国、釈迦族の王妃マヤ夫人は、はじめての御出産のため、当時の慣例にならつて、カピラのお城をあとに、お供の人々と共に、故郷への旅を続けられている途中、ルンビニーという花園で、玉のような王子を御出産されました。この王子こそ、後に人類のため永遠の光明を放つた地上唯一の仏陀・釈尊でした。

伝えるところによれば、この時の釈尊の呱々の声は、天と地を指さして「天上天下唯我獨尊」という、言葉であつたということです。この言葉は、天にも地にも代え難き人間として生れた喜び、この人間の尊嚴を意味するものであるといわれていますが、法華經の方便品の中では

諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ清浄なることを得せしめんと欲するが故に世に出現し給う。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に世に出現し給う。衆生をして仏知見を悟らしめしめんと欲するが故に世に出現し給う。衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現し給う。舍利仏、これを諸仏はただ一大事の因縁をもつての故に世に出現し給うと名づくと示されています。

このような佛陀の出生を「願生」といへ、これに対して凡夫の出

## 人間讃歌

生を「業生」というのですが、もとより「願生」とは衆生救済の誓願をもつて生れて来ることであり、「業生」とは、そうした誓願もなく迷妄の業の因果によつて生れて来ることです。

蓋し仏教の信仰とは、業生の凡夫も、願生の菩薩となることではないでしょうか。人間すべて、何時かは心ず菩薩道を行じて、成仏することが出来るものです。その要諦は、仏知見の道に入ることです。仏知見の道とは、とりもなおさず法華一乗の、此のお題目を受持することです。この信仰の当所において、業生であつた迷妄の因果を脱して、願生であつた自己本来の姿を発見するのです。如何に業の罪は深くとも、願生の人でなくして、どうして正法法華經を持つことが出来ましょう。

四月八日の花祭り、それは仏陀釈尊の御生誕を祝うと共に、実は生きとし生けるすべての人間を礼讃することでもり、「天上天下唯我独尊」の言葉こそ無上の人間讃歌にほかならないと申せましょ

身延山大学二年 近藤達也

自我偈講義 久遠の本仏と人間釈尊・その六

## 提婆達多に対した

### 釈尊の人間観の中に

日 高 白 象

提婆達多が、どんなに極悪非道な人間であつたかと  
いうことについては、先きに二月号で概略述べた通り

ですが、今回は、こうした悪逆の提婆達多に対する、  
釈尊の人間観について、ふれてみるとことにいたしまし  
よう。することによつて、

「人間釈尊こそ久遠の本仏である」

ということの反証する根拠を、見出すことが出来る

と思うからです。

提婆達多の反逆は、阿難尊者が釈尊に常随していた  
頃に起つた事件であつたのですから、かの慘烈をきわ

めた実兄の悪逆を、まのあたりにした阿難尊者はもとよりのこと、イトコにあたる釈尊の胸中は如何ばかりであつたことでしよう。

しかも提婆達多の生涯は、そうちした悪逆行爲に対して、一片の反省も懺悔もせずに終つてゐるのです。

少くとも、その臨終の間際において、いさゝかでも反省、懺悔の色を示したならば、それによつて罪を許さ

れ、救済されるテダテもあつたことでしようが、心にその片鱗すらなかつた提婆達多は、たとえ釈尊と近い親戚關係であつたにせよ、必然無間地獄の底へ堕ちるほかはありませんでした。

事実、仏教の長い歴史の中においても、永劫、提婆達多に極悪人の烙印をおし、彼の犯した五逆と誹謗正法の行為は、仏教徒最大の罪として誅められるに至つてゐるほどでした。

ところが法華經第十二章の提婆達多品においては、生涯反省懺悔さえすることもなかつた極悪人提婆達多

できえも、遂に成仏することが出来る、ということが明らかにされているのです。

これは法華經以外の仏教教學上からみれば、まさしく驚天動地の見解にほかならないことでしようが、それのみならず提婆達多品の中では、過去、現在、未来の三世を通して、却つて提婆達多の功德が宣揚されてゐるのです。

今、經文の順序に従つて、過去世における提婆達多の功德から述べてみますれば、まず釈尊みずから、

「我れ過去の劫をおもうに、大法を求むるをもつての故に、世の魔王となれりといえども、五欲の樂をむさぼらざりき。鐘をついて四方につぐ、『誰か大法をたもてる者なる。若し、我がために解説せばし身まさに奴僕となるべし』」

時に阿私仙あり、來つて大王にもうさく、  
「我れ微妙の法をたもてり。世間に希有なるところなり。若し、能く修行せば、我れ、まさに汝が

ために説くべし」

時に王、仙のことばを聞いて、心に大喜悦を生じ、すなわち仙人に随つて、所須を供給し、薪およびコノミ・クサノミを採つて、時に随つて恭敬して与えき。

こゝろに妙法を存せるが故に、身心懈倦なかりき。あまねくもろゝの衆生のために、大法を勤求して、また己が身、および五欲のためにせず。

故に大国の王となつて勤求して、この法を得て、遂に成仏を得ることを致せり。

と仰せられ、更に引きつき、現世における功德について、

ついては、

その時の王とは剛ち我が身これなり。時の仙人とは今の提婆達多これなり。提婆達多が善知識によるが故に、我れをして六波羅蜜・慈悲喜捨・三十二相・八十種好・紫磨金色・十力・四無所畏・

四攝法・十八不共・神通道力を具足せしめたり。

等正覺を成じて、広く衆生を度すること、みな提婆達多が善知識によるが故なり。

と仰せられ、更に未来世における功德については、提婆達多さつて後、無量劫をすぎて、まさに成

仏することを得べし。号を天王如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊といわん。世界を天道と名づけん。

時に天王仏、世に住すること二十中劫、広く衆生のために妙法を説かん。恒河沙の衆生、無上道の心をおこし、無生忍を得、不退転に住せん。

時に天王仏、般涅槃の後、正法世に住すこと二十中劫、全身の舍利に七宝の塔をたてゝ、高さ六十由旬、綏広四十由旬ならん。

諸天人民、悉く雛華・抹香・焼香・塗香・衣服・瓈珞・幢幡・宝蓋・妓樂・歌頌を以つて、七宝の妙塔を礼拝し供養せん。無量の衆生、阿難漢果



## 苦行林の釈尊像

ミライーの如くやせた苦行中の釈尊像

西暦二世紀頃の作、古代仏教美術品中世界的名宝  
全高八十三センチ余、黒褐色岩、高浮彫り、  
一八八九年ガングーラ地方シクリにて出土  
現在パキスタン国ラホール中央博物館所蔵

巣を得、無数の衆生、辟支仏を悟り、不可思議の衆生、菩提心をおこして不退転に至らん。

と予言されているのです。

次に、以上の経文を解りやすく意訳してみますれば  
釈尊は今生で釈迦族の王子と生れながらも、無上菩提  
を求むる心やみがたく、遂に國位をすてゝ出家し、苛  
烈な難行苦行の後、成道されたことは歴史的事実です  
が、この経文によれば、過去世においても、まさにそ  
のように、無量劫の間、生れ代り、死に代り、常に國  
王となつて、しかも迷惑なく無上菩提を求め、六波羅  
蜜の菩薩行を成就しようとしては、六波羅蜜の第一で  
ある布施波羅蜜を行するのに、地位も財産も、そして  
妻子・眷属も、みずから身命をも惜むことすらなか  
つたのでした。

こうした修行が、幾代もつゞいた或る世代、國王は  
遂に王位をすてゝ、政治を太子にまかせ、四方に擊鼓  
宣令して、正法を求めて諸國をめぐりました。

国王は法鼓をうちながら、常に人々に對して、次のように呼びかけました。

「誰か、大乗の妙旨を体得している者はいないか。若し、その人があつて、私のために、その妙旨を伝受してくれるのであるならば、私は終生、その人の奴僕となつてでも給仕奉行し尽すことを惜まないであろう」

何と崇高な国王の悲願でありましたよう。今日本の皇室にも、世界各国の政治家の中にも、この国王のような元首・指導者が一人でも居るでしょうか。少くとも、そうした心がけをもつてゐる人が、幾人いることでしょう。

さて国王は、こうした求道の旅の中、或る時、一人の仙人に出あいました。この出あいは、まさしく稀有なる素晴らしい邂逅でした。仙人は申しました。「今、国王が求めておられる甚深微妙の法は、かねて私が体得しているものである。それは世にも稀なるものであつて妙法蓮華經と名づけられているが、然しこ

の妙法は、單に理論だけで修得されるものではない。全身全靈を擣げた身口意の三業による修行が肝心なのであるから、若し国王が、能くこの三業修行を全うするならば、その行に応じて、私の体得している妙旨を宣説伝受してあげよう」

王は歡喜踊躍しました。良き指導者にめぐりあえた喜びは、天にも昇り、地にも躍るようでした。さつそく国王は、仙人に隨順して必要なものは悉く供給し、またみずから木の実、草の実をとり、水を汲み、薪を拾い、食をもうけ、万般、身をさゝげて給仕の誠を尽しました。その給仕は求道の一念に凝集して、仮にも身心に怠ることはありませんでした。

国王の求道、それは自分一身のためではなく、ひたすら一切衆生救済の大願を成就せんとするものでした。仕える修行は、日夜真剣そのものであり、謙虚そのものでした。しかも、こうした修行は、二年・三年と限

らず、千歳にも及んだのです。

この修行を通常「千歳給仕」と呼んでいますが、仏道修行の基範は、こゝにあります。日蓮宗門の行規にも、給仕第一・信行第二・學問第三とうたわっていますが、絶対隨順の給仕修業こそ、一舉手一投足と日常生活を共にする中に、指導者の全人格にふれ、その人格を通して全一的に、その悟道の妙旨が、水の流れるが如く、無漏相伝されるのです。

かくして国王は、阿私仙人に絶対隨順の給仕を尽すことによつて、阿私仙人の人格を通して、遂に悟道の妙旨を、身を以つて習得し、仏陀となることが出来たのでした。

ところが何といふことかしよう、提婆達多品においては、「その時の国王とは、私の過去世の姿であり、その時の仙人とは、今生、私に反逆の限りを尽くして、永劫教われること難し、と思われている提婆達多の過去世

の姿である。提婆達多こそ、過去世においては、順縁の善知識、今生においては逆縁の善知識、順逆二縁の善知識となつて、私をして仏陀としての内容と資格を具足せしめたのである。

重ねて言おう。私が正覚を成じて、広く一切衆生を済度することが出来るのも、悉く提婆達多の善知識によるお陰である。」

と、积尊みずから悪逆の提婆達多に対して、無上の感謝をあらわしておられるのです。

これは驚くべき积尊の言葉です。仏陀积尊の境地でなければ、言えないところのものであります。更に驚くべきことは、提婆達多の未来世を讀えて、

「提婆達多は今生の惡業によつて未來無量劫の間、無間地獄におちて苦しむであろう。然し、その後は必ず菩薩道を行じて、まさしく成仏するであろう。成仏のあつかには、天王如来としてあがめられ、その国土は天道の淨土といわれるであろう。」

天王如来は天道国土において、広く一切衆生のための宝塔におさめられ、限りなき人々によつて礼拝供養されるであろう。のみならず天王如来の滅後、その仏舍利は七宝

に法華經を宣説し、無量の人々を利益・救済するであらう。この書の中にも、

「地獄の心を起す時は、則ち法界みな獄なり。仏心を起す時は、則ち法界みな仏なり」

の人々でさえも、また無量の利益と救済をうけるであろう」

と予言されていることです。

則ち釈尊は、提婆達多の惡逆の現身に、過去世においては自分のために法華經を説かれた阿私仙人、未来世においては一切衆生のために法華經を説く天王如来

という仏身を、三世を通して感ぜられ、更に天王如来の滅後における、その仏舍利塔供養の利益までも讀えておられるのです。

法華經第二十章の常不輕菩薩品の中では、不輕菩薩が道ゆくすべての人々をはじめ、これを罵詈打撻する人々に対してでも、

我れ深く汝等を敬う

9  
敢て軽慢せじ

以上が、提婆達多品の中に説かれている釈尊の、提

所以はいかん

汝等みな菩薩の道を行じて

まさに作仏することを得べし

と、たゞえながら但行礼拝の行をつらぬいたという有名な物語りが説かれています。通常、不輕菩薩のこの礼拝行をもつて、「仮性礼拝」と称し、

「不輕菩薩は、すべての人々が生々世々、生れながら本來もつているところの仮性を礼拝されたのである」と解釈しています。これは一切衆生悉有仮性を建前とする、大乗仏教の通念ではあります。然しこれだけでは、法華経論門の「理の一念三千」の域を出るものではありません。

では、法華經本門の「事の一念三千」の立場では、どのように解釈されるのでしょうか。むべなるかな、日蓮大聖人は不輕菩薩の礼拝行を釈するに、「観心本仮鈔」の中で、

「不輕菩薩は所見の人において仮身を見る」と唱破されているのです。

接する人ごとに仮身を見るということは、三世を通じた本門法華經の人間觀と申せましようが、それにはそういう見解を持つことの可能な境地がなければなりません。その境地こそ、人間釈尊が久遠の本仏であることを顯現された本仏果上の仮界なのです。

この仮界にあつては、地獄・餓鬼・畜生・等々の三惡六道の群類までも一人残らず、妙法五字の光明に照されているのです。

不輕菩薩は、この本仏果上の仮界に、常に住しています。そして老若男女・貧富貴賤・學無学の如何を問わず、或は信仰の有無・誇法の如何を問わず、すべての人々が悉く本仏の光明に照されているのを見ています。私は貴方がたを深く敬います。決して軽んずることはありません。何故ならば貴方だかはどなたでも、今生でなければ次の生、次の生でなければ、また次の生、永遠の未来にかけて必ず菩薩道を行じ、行ずることによつて、きつと仮陀となることが出来るからです

そして仏陀として、広く無量の人々を教化利益されるからです。

その時の貴方がたの尊い仏身を思う時、今生只今、貴方がたが、何を思い、何を語り、何を行つていようとも、私は貴方がたを敬わずにはおられないのです」

と言つて、すべての人々に対して、或は追害する人々に対しても、合掌礼拝されたのでした。

「不輕菩薩は所見の人於いて仏身を見る」と大聖人が仰せられたのは、まさしく、こうした見地にほかならなかつたことでしょう。

この一班をもつとして、提婆達多品の中で、釈尊が提婆達多に対し、過去においては阿私仙人、未來においては天王如来という仏身を、三世に亘つて感ぜられつゝ、今生惡逆の提婆達多こそ、無二の善知識と仰いで感謝された境地も、おのずから、推量されしないでしようか。

悪人提婆達多が今生、一片の反省も懺悔もしないまま、犯した罪業によつて来世、無間大城の底に沈み、

ところで、こゝに次のような矛盾を感じられる方がおられることがあります。それは、

「阿私仙は、國王に対して妙法蓮華經を説かれたほどの方であるから、たしかに正覺の仏陀であるはずだ然し、その仏陀が、どうして提婆達多のような極惡人として生れ代つたのだろうか」

ということです。

これは、全く理解に苦しむ大矛盾です。たとえ逆縁から、釈尊の修行を助ますために、仮りに悪人として変化（へんげ）したものであつたとしても、提婆達多の犯した罪は、あまりにも深刻であり且つ重大です。

仏陀が、そうした重罪を犯すはずはありません。

によつて遂に成仏するということは、悉皆成仏の建前から当然納得されることではあります、然し、過去の仏陀が、今生において悪人提婆達多として生れ代つて来るということは、どうしても考えられない矛盾したことです。この矛盾は、一体どうすれば解決されるのでしようか。

それには、仏陀釈尊自身の仏知によるほかはあります。釈尊の仏知は絶対的なもので、絶対とは、空間にいえば彼此、善悪等の一切の対立を超絶したもので、それは、提婆達多とその対立をくらぶれば、それは極善なるものと極悪なるものとの対立とも申されましよう。然しこえたものであり、いうなれば善悪不二なるものであつたのです。そして善悪不二なる立場から、提婆達多の悪逆をみられたればこそ、その悪逆も逆縁の善知識と仰ぎ、感謝されたのです。

このことは、日蓮大聖人が忍辱弘教の問、迫害し来る法敵者に対して、富木殿御返事の中で、「もろ／＼の悪人は善知識なり」と仰せられ、或は種々御振舞御書の中でも、「相模守殿こそ善知識よ平ノ左衛門こそ提婆達多よ」

「日蓮が仏にならん第一の方人（かたうど）は景信、

と仰せられて、或は種々御振舞御書の中でも、

法師には良觀・道隆・道阿弥陀伝、平ノ左衛門尉・守殿おわしますれば、いかでか法華經の行者とはなるべき」

「釈迦如来の御為には提婆達多こそ第一の善知識よ」

と仰せられている言葉を顧りみれば、思い半ばにすきるものがあります。

釈尊の絶対的な仏知見とは、そうした一切の対立をもとより提婆達多の反逆は、釈尊成道後の、しかも晚年のことですから、提婆達多品の經文の如く、直接には、

「釈尊は、提婆達多を逆縁の善知識として成道する」とが出来、また引いては、広く人々を教化利益するこ

とが出来たのだ」

とは言い難いことですが、然し釈尊の胸中には、それに匹敵するほどの感謝の念のあつたことは、いなめない事実であります。

肝心なことは、釈尊の此の感謝の一念なのです。このやみがたき感謝の一念が、今生のみならず過去世にまでさかのぼり、国王が阿私仙人を縁縁無二の善知識と仰いだという物語りとなつて、展開されて来るのです。

従つて、国王と阿私仙の故事は、過去世における歴史的物語ではなく、むしろ釈尊の胸中における実存的物語といわるべきであります。

この物語の中、過去の仏陀が、阿私仙という仙人では、

あつたことは不可解なことです、然しこれは、釈尊がカピラ城を去つて出家し、修行時代に師事したアララ仙人やウツダガ仙人より連想されるものであり、また釈尊が過去世において國上であつたということも、

釈尊が釈迦族の太子であつたという事実より連想されるものです。

といつて、この故事を単なる架空の物語として軽視することは出来ません。何故ならば、この物語こそ、釈尊が提婆達多を善知識と仰ぐ感謝の一念よりほどばらしたものであり、釈尊の此の一念の中には、現在を中心として過去世をふりかえる中に、逆縁提婆達多の前身を、縁縁無二の善知識とまで仰がすにはおられなかつた阿私仙人という仏陀が、実存していたのですから

## 11

提婆達品の前段である惡人成仏の項の最後のサワリ

未来世の中に、若し善男子・善女人あつて、妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して、疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、十方の仏前に生ぜん。所生の處には、常

に此の經を聞かん。若し、人天の中に生れるば、  
勝妙の樂を受け、若し、仏前にあらば、蓮華より  
化生せん。

と仰せられた釈尊みずから言葉そのものであるこ  
とは申すまでもありませんが、思うに提婆達多品は、  
五逆・詐誘正法の極悪人提婆達多を善知識と仰ぎ、こ  
れに限りなき感謝を挙げて、その惡逆の現身にさえ、  
三世を通して仏身を感じられた釈尊の、その心を克明  
に書き出している經典です。

従つて、提婆達多品に開闢された釈尊の、善惡不二  
なる絶対心から、更に己れに敵する者にも感謝し、給  
仕報恩せんとする大慈悲心を、若し人あつて清淨に信  
敬するならば、極惡人提婆達多でさえも、未來世にお  
いては天王如来として仏果を成し、その滅後、仏舍利  
を留めてまでも、無量の人々を利益するというほどで  
すから、まして提婆達多などの惡人でもない一般の人  
々は、もちろん地獄・餓鬼・畜生、等々の三惡道に堕  
つて、

ちずして、一仏乗に住するということは、蓋し当然のことゝ申されましよう。提婆達多品が施餓鬼法要の際  
特に尊重される所以が、こゝにあります。

「人間釈尊こそ久遠の本仏である」

以上、提婆達多に対した釈尊の、三世を通じた人間  
観を述べたわけですが、このことは、とりもなおさず  
提婆達多についてもさえも、現在を時点として、過去  
世にあつては阿私仙人として法華經を説いた仏陀であ  
り、未來世にあつては天王如来として法華經を説く仏  
陀であると、三世を通して仏身を觀せられた釈尊の、  
その心に立ち入つてみると、現身に仏身を成就させ  
れた釈尊そのものにも、現在を時点として、過去世に  
ふりかえるならば、始めなき久遠の昔より既に仏陀で  
あり、未來をたずぬれば、終りなき永遠の未來にかけ  
て変りなき仏陀である、という久遠の仏身を主張する  
ことが出来るからです。

△以下次号▽

# 靈鷲山と身延山

インドへ渡つた

## 身延山釈尊像の由来

その二

### 日高白象

それは昭和三十六年十一月十二日のことでした。身延山奥之院思親閣の大聖人の御尊靈に対し、「御殿場の富士仏舍利塔正面本尊として安置するのに、ふさはしき本仏釈尊の御尊容を靈示せしめ給え」

と、願立てた三徳社長堀内貞良氏は、单身、ウチワ太鼓をうつて奥之院思親閣へと登つて行きました。

それは堀内氏が二十代の青年時代より三十有余年来、毎月欠かさず月参りをしていた参道であり、三徳の会社を起してよりは、必ず年に二回、従業員数百名と共に、擊鼓の法音を全山にとどろかせつゝ登りつゝけていた五十丁の道でした。



「貞良よ、父なき後、なお父に会いたいと思うならば身延山の奥之院へ来るがよい。そこで父は待つてゐる必ず姿を現わすであろう」

当時、まだ身延線の鉄道は敷かれていませんでした

青年堀内氏は、毎月一回、曾つて御尊父が生前そうしていたように、弁当を腰にさげ、故郷御殿場より三十里の道を歩いて身延山へお詣りし、更に奥之院に登つていたのです。

この間、もとより御尊父の姿にあえるはずはありま

せんでした。然し、こうした毎月の修行によつて、身延全山にこもる大聖人の息吹きを、月日と共に強く感ずるようになり、法華経の信仰を通して、深く御尊父の心にふれることが出来たのです。

後年、三徳の従業員と共に数百丁の太鼓をうつて奥之院へ登詣するのも、大聖人の二陣・三陣として、一闇浮提に立正安國の祈念をこらすためでした。

然し、昭和三十六年十一月十二日の、この日の登詣

は、全国にワラジをはいて探しても得られなかつた本仏釈尊の御尊容を、もはや仏祖の靈示によつて仰ぐほかすべもなかつた堀内氏の、ギリ／＼するような祈念によるものでした。

登る五十丁の参道、ふみしめる一步／＼の足にも、唱えるお題目の一声／＼にも、うちならず法鼓の一つ／＼の法音にも、富士仏舍利塔の正面本尊としてふさわしき、本仏釈尊の御尊容を、靈示として受ける否や

という祈願が賜けられていました。

山頂の祖師堂の、開扉された大聖人の御宝前にぬかずいた堀内氏の祈願は、あふれる熱涙と共に、仏舍利塔建立の大誓願を立てゝ、その工事も日々に進捗させながらも、なおいまだ正面御本尊としてふさわしき本仏釈尊の御尊容にあい奉ること難き、みずから罪業を懺悔慟哭するばかりでした。

然し、心をこらした祈願には、何の感応も靈示もありませんでした。然し、堀内氏は失望しませんでした

むしろ更に湧き起る新しい斗志に奮い起つていました

それは静かな、謙虚な斗志でした。

△靈示がないのは、私の修行が足りないからだ▽

△然し、仏祖三宝は、必ず照覧されている▽

△私の老齢が正しければ、必ず感應、靈示はあるはずだ▽

山頂の祈願を終つた堀内氏は、登つて来た参道を、

再び擊鼓しながら下つて行きました。

ところが二十五丁目の三光堂の前にさしかゝった頃のこと、フト右手に端座合掌してゐる金銅の露座仏が眼にうつりました。その刹那、電光の如くきらめくものがありました。

堀内氏は、あたかも雷にうたれたように、露座仏の前に土下座しました。大地にすりつけた頭は、暫し上げることは出来ませんでした。

△そうだ、このお釈迦さまだ。このお釈迦さまこそ、

仏祖の靈示し給うた御尊容だ▽

△身は太子として生れながらも、王位もすてゝ難行苦

行し、しかも成道の後もなお、道傍に端座して、雨に

うたれ、風にさらされ、夏の暑さにも、冬の寒さにも堪えながら、なおも末法万年、ひたすらに一切衆生の

成仏を祈つて、但行礼拝されているお釈迦様さま▽

△お釈迦さまの前世には、曾つて常不転菩薩としての

修行時代があられたといふ。その常不輕菩薩の生涯は

一切衆生の悉皆成仏を信じて、

「我れ深く汝等を敬う」

△という但行礼拝の一行為に貫いたものであつた。そしてこの因行によつて、遂に仏陀となられたお釈迦さまは本仏果上にあつて、なお因位の行体をもつて、一切衆生の踏むべき但行礼拝の菩薩道を示されている▽

△法華經信仰の極地は、こゝにある。世界全人類は、

仏陀のこの一行を基範として、はじめて地上に恒久平

和を創造することが出来るのだ▽

△体を起し、土下座したまゝ擊鼓唱題する堀内氏の顔



昭和40年1月22日朝、インドへ渡る身延山金銅の釈尊像をお迎えに来た  
三徳社長 堀内貞良（左）とその長男誠君（右）

は、滂沱とあふれる涙にぬれていきました。

△灯台もと暗し。全国にワラジをはいて、どんなに探し求めて得られなかつた本仏釈尊の御尊容は、実は何百年の昔から、既に身延のお山に厳然としておられたのだ▽

堀内氏は、大聖人の魂のしすまりいます身延山の尊さを、今更ながら深く感うたれると共に、

△身延のこのお釈迦さまこそ、全世界の闇を照す御尊容だ。御殿場の富士伝舍利塔の本尊も、身延のこのお釈迦さまのお姿を、そのままそつくり写して、お迎えしなければならない▽

と決意したのでした。

### 身延山三光堂の釈尊像の鑄造

堀内氏は、用意していたカメラで、あらゆる角度から露座仏の御尊容を、数十枚も撮影しました。丹念に調べてみれば、金銅のお体には、本誌三月号の第八頁

にも述べていたように、無数の亀裂が生じており、ひとたび地震にあれば、全壊してしまうのではないか、と恐れられるほどに痛んでいました。

さつそく堀内氏は、本山当局に対して、このことを申上げ、

「三光堂の釈尊像は、もはや修理も不可能なほど痛んでいます。このままでは何時、全壊するかも判りません。そこで、この御仏像を、そつくり鋳型にとつて、もと通り鋳造再現するほかはありません。

その仕事は、どうか私にやらせて下さい。そして願くば、その鋳型によつて、もう一軀、御殿場の富士仏舍利塔正面本尊として再鋳造し、勧請することをお許しください」

と願い出ました。本山本局として、これに異存のろうはずはありません。堀内氏の請願は直ちに快諾されました。

翌る月の十二月十四日、堀内氏は京都へ赴き、十五

十六日と三日間、市内各所の鋳造所に相談して廻り、その結果、平安美術で鋳造することが決りました。

昭和三十七年二月八日、堀内氏は身延山奥之院思親

閣へ登詣し、このことを大聖人の御宝前に報告。翌九日、三光堂の釈尊像と蓮華の台座は、三徳のトラックに積まれ、十日真夜中の午前零時、トラックは身延山を出発、静かに京都へ向いました。

平安美術では、この仏像と台座を原型として、寸分も違わぬ鋳型がとられ、この鋳型によつて、新しく仏像と台座が鋳造されました。台座の刻銘も、そのまま、そつくり彫り込まれました。仏像は二軀、一軀は御殿場の富士仏舍利塔へ運ばれました。

身延山三光堂の釈尊像と台座が、京都を出発したのは四月六日のことでした。翌七日、三光堂の元の場所に取りつけられ、四月八日の釈尊降誕会を期して、法主猊下大導師のもと、莊嚴な入仏式がいとなまれました。今、身延山奥之院思親閣へ登る五十丁の参道の中

間、二十五丁目の三光堂の前庭に、参道へ面して安置されている金銅の釈尊像が、則ちそれです。

ところが計らずも、この釈尊像の鋳型が京都の平安舍利塔の正面本尊として、身延山金銅の釈尊像を、寄贈する大きな契機となつたのです。

### 王舎城復興の気運

ヘインド王舎城仏舍利塔の正面本尊として、身延山の金銅の釈尊像を寄進しよう。

ということになつたのは、三光堂の入仏式後、ほどもない此の年（昭和三十七年）の夏、六月十六日より三日間、インドの首都ニューデリーにおいて、核武装反対世界平和大会が開催された、その後、この大会

に日本を代表して出席していた日本山妙法寺の山主藤井日達上人を中心として、昭和三十五年の春に結成されたいた王舎城仏舍利塔建立小委員会（別名・七人委

員会）が、王舎城仏舍利塔奉賛会として発展し、ネー

ル首相が委員長となり、ネール首相の令嬢インデレラ

・ネール、大蔵大臣モラロチー・デサイ、その秘書官

・マヘシー・クマール・コタリ、B・N・シン前駐日大使、カカサープ上院議員、更に王舎城がビハール州のバトナ県にある関係上、ビハール州の首相ビノダ・ナ

レダ、パトナ県知事ソニー、パトナ工芸試験所長ベン

ドラ・マハラティー、或はインド第一の財閥ビルラ財

團会長ビルラ長者、並にインド財界代表およそ十名、

政界・学界・技術陣などインド各界の要人を網羅し、

プラサード前印度大統領は顧問となり、藤井日達上人は乞われて王舎城復興の総指揮の任に当ることとなつて、予算十五億を計上。昭和四十年度の着工を目指して実動に入ることとなつたからです。

若し、藤井日達上人が王舎城復興の総指揮に任せられなかつたならば、おそらく身延山から金銅の釈尊像を、仏舍利塔正面本尊として寄贈することも、容易な

ことではなかつたでしよう。

思えば今回、王舎城復興の総指揮権を委託された藤井口達上人が、昭和五年八月二十五日、身延山奥之院

親思閣を起点として、単身、法鼓をうつて西天インド開教の旅に立つたこと、思いあわすれば、身延山金剛の釈尊像の渡印は、まことに不思議な因縁というほかはありません。

仏舍利塔は王舎城を囲む五大山（靈鷲山・多宝山・放広山・黃金山・興起山）の中、最も高く、最も大き

な山といわれた多宝山の山頂に建てられることとなりました。この多宝山は原名をビフラ・ギリーというのですが、法華經々典の中では、釈尊が靈鷲山上において八ヶ年の間、法華經を説法された折、見宝塔品第十

一において、七宝の多宝仏塔の涌現した靈山と伝えられており、日蓮大聖人の御遺文の中では、女人成仏抄に、その原名を用いて、

「かくのごとく、いたずらに命を捨てたるところの該した」

骨は、ビフラの山よりも多く、恩愛あわれみの涙は、四大海の水よりも多けれども、仏法のためにには一骨をも投げず」

と仰せられた一節によつても知られている靈山です。王舎城の規模は、丁度京都の市内ぐらいだといわれていましたが、昭和三十七年の夏、新発足した王舎城仏舍利塔奉賛会では、この城趾を中心に、城趾を取り囲む五大山をもふくめて、大公園化することが立案されました。

そして多宝山（ビフラ山）の頂上には仏舍利塔、麓より山頂へかけるロープウェイ、靈鷲山の第一峰には僧院、第二峰には本堂、靈鷲山の山麓には、現存する湖を拡大して、ガンヂス河より運河で水を引いた大人造湖。その周辺には、法華經を中心とした王舎城仏教大学、附属図書館、各國學寮、一般宿舎、等々が建設され、更に庭園、温泉も設備される計画が立てられま

インドの仏教は、ヒンズー教のため衰微し、回教によつて破壊され、王舍城の五大山には、各所にヒンズ

ー教の廟塔が建ち、ヒンズー教の信徒の参拝も少くはありませんが、靈鷲山と多宝山には、仏跡は破壊されても、三千年來、ヒンズー教や回教、その他いすれの宗教の廟塔も建てられずにして残されていました。これは不思議な現象ですが、思えばインドの仏教復興のための、諸天の計らいであります。

多宝山に仏舍利塔が建ち、靈鷲山の第一峰（釈尊八ヶ年法華經説法の場所）には僧院、第二峰には本堂が建てられるということは前述の通りですが、第三峰は実は三千年の昔、仏滅直後、釈尊の仏舍利を八分にし舍利壺と灰炭とあわせて十塔供養をした、その中に、第一塔がマカダの阿闍世大王によつて建立された聖地であります。

今は回教徒の破壊によつて、仏舍利塔は跡形もありませんが、日蓮大聖人の御遺文では波木井殿御書の中

で、

釈迦佛は天竺の靈山に居して八ヶ年、法華經を説かせ給う。御入滅は靈山よりウシトラに当れる東天竺クシナガラ城、跋提河の純陀の家に居して入滅なりしかども、八ヶ年、法華經を説かせ給う。山なればとて、御墓をば靈山に建てさせ給いき。されば日蓮も、かくの如く、身延山よりウシトラに當りて武藏国（ムサシノクニ）池上右衛門大夫宗長が家にして死すべく候か。

たとい、いなくて死に候うとも、九ヶ年の間、心安く法華經を説誦し奉り候う山なれば、墓をば身延山に立てさせ給え。未来際までも、心は身延山に住むべく候。

と仰せられられてゐる通り、由緒ある靈峰なのです。

もとより波木井殿御書は、後世の偽書といわれていますが、たとえ偽書であつたとしても、仏滅直後の十塔供養の中、その第一塔が阿闍世大王によつて、靈鷲

山の第三峰（三峰中、最も高い峰）に建立された、歴史的事実に変りはないのです。

### インドへ渡る釈尊像の铸造

こうした王舎城復興の気運に際して、身延山を本として世界宣布を志す識者の中には、

「この時こそ、身延山の金剛の釈尊像を、王舎城仏舎利塔正面本尊として、身延山から寄進すべきである。これによつて身延山も、世界の大身延山と仰がれるようになつて来る」

という声が、翕然として起きてきました。日本山々主藤升日達上人も、この計画には双手をあげて喜ばれました。そして、

べき瑞相なり

「若し、身延山より釈尊像が寄進されるならば、私が責任をもつて、必ず仏舎利塔正面本尊として御安置申しあげよう」

と確約されました。三徳の堀内氏は、三光堂の釈尊

像を復元した仏縁にもとづいて、インドへ寄進する釈尊像の铸造を発願しました。

同年八月三日、堀内氏は身延山に詣で、このことを法主藤井日静猊下と総務望月口雄上人に進言しました。「幸い、三光堂の釈尊像の铸型が、京都の平安美術に格護されていますので、お許し頂けますならば、この铸型によつて、渡印の釈尊像を三徳に铸造させて頂きたいと思います。経費は一切、三徳で負担申上げます。そして身延山に寄進いたしますので、渡印に際しては身延山から、身延山の名のもとに、インドへ寄進して頂きたいたいと思います。これによつて、

八日は東より出て西に入る、日本の仏法の月氏へ返る

という大聖人の、諫曉八幡鈔の未来記が、具体的なものとなり、釈尊が本仏として八ヶ年の間、法華經を説かれたインドの靈鷲山と、大聖人が本化上行菩薩の再誕として九ヶ年の間、法華經を説誦された日本の身

延山とが、法華經によつて直結されるならば、この両

奥行 四尺八寸

山一体を本として、やがてアジアの仏教圏は法華一仏

重量 一八〇貫

乗に開闢され、世界平和の基盤を築くことが出来まし  
ょう。三徳の光榮これにすぎたるものはありません」

身延山当局では、直ちに首脳會議が開かれました。

そして翌八月四日、法主猊下みずから快諾の旨が伝え  
られたのです。

さつそく堀内氏は京都へ飛び、平安美術に釈尊像の  
鑄造を発注しました。金銅の厚みも従前の二倍とし、

表面のスミトギも入念にするよう、そして世界の人々  
が仰ぐ王舎城仏舍利塔本尊として万世に悔を残さぬよ  
う、そして身延山の釈尊像が日本佛教を代表するもの  
として見事な仕上げをするよう、依頼しました。

台座はインド側で作製するため、今度鑄造するのは

釈尊像のみでしたが、その立体は、

高さ 六尺七寸五分

幅

五尺八寸

それは三光堂の釈尊像と寸分も変らぬものでした  
が、金銅の厚みを二倍としだけ、重量は倍近く重くなつ  
てしました。

さて、これが完成したのは同年十二月八日、あたか  
も釈尊成道の聖日でした。堀内氏は東京の本荘より三  
徳のトラツクをもつて、京都までお仏像を出迎えを行  
きました。

トラツクが京都を出発したのは十二月十九日の午後  
三時、道中十二時間要して、身延の三門に到着した  
のは翌二十日の午前四時、折から開設されていた西谷  
一百日間の大荒行堂の打つ鐘の音が、深く静まりかえ  
つた闇の中に流れていました。

二十日の朝勤の中、夜が白々と明けるや、釈尊像は  
トラツクから本師堂の前に降され、本師堂の内陣奥深  
く安置し終つたのは午前十一時。直ちに法主猊下大尊

師のもと法味が献げられました。この時、堀内氏は、感動のまゝに二種の句を歌いました。

仏さま更衣に黄金で面を染め  
お里帰りの時ぞ近く

我が道を弟子に伝えて里帰り

仏は立ちし西行の旅

かくして渡印の釈尊像は、昭和三十七年十二月二十一日の朝、本師堂に安置されてより、昭和四十年一月二十三日の朝、インドへ向つて身延山を出発するまで、およそ三ヶ年の間、毎朝の法主猊下の読経をはじめとして、全国より身延山へ参拝に来た数千万にのぼる寺院檀信徒によつて法味が捧げられたのです。

△以下次号▽

申込所 山梨県身延町波木井三区

醒悟園本妙庵 鷲峰会

## 釈尊像の写真頒布

一、身延山よりインド王舍城仏舍利塔正面本尊として贈られた金銅の釈尊像（本誌毎号の表紙写真）

一、本年四月六日、醒悟園本妙庵に入仏勧請された転法輪の釈尊像（本誌今月号「本妙庵に入仏式」の記事掲載の写真）

一、ガンドーフ出土の苦行林の釈尊像（本誌今月号九貞掲載の写真）

右三葉の釈尊像の写真は、読者の御希望に応じ、実費で頒布いたします。全紙・半切・四つ切り・等の大きさ、並にパネル張り等々御指定の上、御申込み下さい。

はく

えん

にし

さわ

ゆかり

ここんこんと古き泉は湧きてをりこの清新の水におののく

幸はここにもありき山にきて欲る書の名を木に刻みつつ

—筆者紹介—

西沢縁(にしざわ、ゆかり)さんは、多年キリスト教に奉仕し、戦後創価学会に入り、苛酷な魂の過歴後、はじめて薙峰誌を通して日蓮宗に改宗、熱心な信徒となる。昨年の夏、処女作「白炎」歌集を出版。これにより現代女流百人集に選ばれる。ベンヌーム西沢みち子、潮音同人・白夜選者。住所は東京都渋谷。

仏語解釈

娑<sup>しや</sup>

婆<sup>ば</sup>

即<sup>そく</sup>

寂<sup>じやく</sup>

光<sup>こう</sup>

藤<sup>ふじ</sup>

原<sup>はら</sup>

成<sup>じょう</sup>

憲<sup>けん</sup>

るものではありません。

国家・世界という人間環境の事相を主体として用いられているもの

人間と環境、それは有機的に相関相資しています。人間が環境を

婆婆即寂光という言葉は、煩惱即菩提とか生死即涅槃という言葉と共に、よく一緒に用いられる佛教用語です。

もとより煩惱即菩提とか生死即涅槃というのは、人間の精神内容を主体として用いられているもの

たかも水と魚のように、切つても切り離されない不可分の関係にあるものであつて、環境なくしては人間はもとより、生きとし生けるすべてのものは、片時も生存出来

境に影響されるところ少くはありません。

もあり、一方、婆婆即寂光というのは、草木国土をふくめた社会・

本来、仏教は唯物論に対する唯心論のようなものではなく、物心一如の立場に立つ由心論である、

といわれています。

たとえば赤いメガネをかけねば世の中のすべてのものは、悉く赤く見え、青いメガネをかけねば、すべてのものが悉く、青く見えて

来るようなものであつて、たとえ対象は同じものではあつても、もの見方、心の見方、心のうちの如何によつて、どのようにでも変化して映つて来るのです。

そこで、あくまでも人間の心が主体であつて、環境は客体であると申せよしよう。

「地獄の心を起す時は、則ち法界みな獄なり。仁心を起す時は、則ち法界みな仁なり」と了し、念々すべからく「界に住すべし」

と言われる所以も、こゝにあるわけです。娑婆即寂光というのもこれと同様であつて、娑婆即寂光と言ひ得る、ものゝ見方、心のもの見方があるのです。

この境地は、煩惱即菩提・生死即涅槃という境地と、あい通するものですが、こうした境地を、みずからの中に確立してこそ、そ

の環境の当所に、娑婆即寂光の風光が歎見され、またそうちの人々の社会に、はじめて娑婆即寂光の事相が創造されるのです。

さて煩惱といゝ生死といふのは要するに凡夫の迷える濁惡の世界のことであり、菩提といゝ涅槃といふのは、誑するところ仏陀の悟れる清淨な世界のことであつて、この両者は、全く二律背反したものです。

則ち、前者は無常転滅する相対

離こそあれ、全く同一のものである、と言つてることが出来ましよう。

的なもの、後者は永遠不滅なる絶

対的なものであつて、この両者は、一見、あい交わることさえ許され難き敵しさが感ぜられるほどです。

国土についても同様であつて、

娑婆即寂光といふ、その娑婆とは煩惱甚重、生死無常なる穢土のことであり、これを譬えれば、法華經第三章の譬喻品の中で、

三界は安きことなし

なお火宅の如し

衆苦充満して

甚だ怖畏すべし

常に生老病死の憂患あり

かくの如きらの火

熾然としてやます

と述べられている通りです。

このように娑婆世界と寂光淨土

一方、寂光といふのは、常寂光士の略で、一口にいえば仏陀の常住する仏国土のことであり、これを譬えれば、法華經第十六章の如

来寿量品の中で、  
我が此の土は安穩にして  
天入つねに充滿せり  
園林もろくの堂閣

種々の宝をもつて莊嚴し  
宝樹花果多くして  
衆生の遊樂するところなり  
諸天、天鼓をうつて

宝樹花果多くして

衆生の遊樂するところなり

諸天、天鼓をうつて

常に生老病死の憂患あり

曼荼羅華をふらして

仏および大衆に散す

と述べられてゐる通りです。

とは、天地山川などにも相違した世界です。

そこで、その相違を五十万億と  
いう距離であらわし、苦の娑婆世界を嫌離して、極樂淨土へ住生じ  
ようという念佛信仰も起きてゐる

わけです。キリスト教では、神の  
天国と、人間の罪の世界とを、は  
つきり隔絶しています。

それほど人間の世界と、神仏の

世界との開きが、甚しいものと申

されましょ。

然し、娑婆世界が、如何に濁悪

苦惱にみちくた火宅であつたと

しても、それを嫌離してしまつて

は、人類の地上における生存の、

成り立つはずはありません。

そこで、真言や禪のように、娑婆の当所に、寂光の浄土を見出そうとする宗教も起きて来ているわけですが、真言や禪に限らず、もとより釈尊の示された仏教本来の教えといふものは、三世を通して現実に、人間の在り方と、世の在り方を示すものでした。

それは形而上の學的な靈界を主体とするものでなく、あくまでも現実を主体とするものでした。

そして仏陀の淨土と、凡夫の繩土とのへだたりを、如何にして繪め、如何にしてなくするか、ということに全力がそそがれたのです。大乗仏教に至つて、一切衆生悉

有仮性の理を基盤として、娑婆即

寂光の理想がうたわれました。それは人間完成と、浄土建設へ立ち向う、素晴しき進軍でした。

然し、この理を本として、如何に觀念觀法をこらしたとしても、現実における、生老病死の人間苦、弱肉強食の社会苦を解決する、何の力にもならず、却つて、その宗教自体、大衆より遊離した独善に墮ち入つていたのです。

こゝに抬頭して來た末法思想と平行して風靡したのが、念佛の往生成仏信仰なのですが、即身成仏

と往生成仏、娑婆即寂光と来世成求の両思想こそ、仏教の二大潮流となつたのです。

前者は衆生本来の仮性を開顯せ

んすることを主体とし、後者は衆生を救濟せんとする如來の悲願を主体とするものであつたのです

が、然し、そのいずれにしても、人間の現実苦を解決するのに、正当を得たものでなかつたことは申すまでもあります。

その理由を説明する暇はありませんが、こうした二大潮流の競うちを突き抜けて、開顕宣布されたのが、日蓮大聖人の法華經信仰であつたのです。

さきにも述べましたように、煩惱即菩提にしても、生死即涅槃にしても、それは凡夫の立場でいえ

るものではなく、仏陀の立場において、はじめて言えるものである通り、娑婆即寂光を言うにしてもそれは仏陀の立場において、はじめて可能なことなのです。

凡夫の立場からすれば、娑婆世界と寂光淨土とは、たしかに天地靈境の相違がありましよう。

然し仏陀の立場、しかも法華經に開闢された久遠の本仏釈尊の立場からすれば、本仏釈尊によつて完成されている本仏の仏界は、常

娑婆世界の、生きとし生ける、在りとし在らゆる、すべてのものが悉く危機々取されています。

娑婆即寂光ということは、既に本仏釈尊の如來秘密神通之力によつて、仏果々上のものとして完成されているのです。

法華經の本門虛空会の儀相は、これを物語つているものであり、日蓮大聖人の岡頬された大マンダラは、実は、これを象徴しているのです。

然し、如何に法華經を信じてゐるとはいっても、いまだ迹門のみに留つている者は、本仏釈尊の実在を信せず、いわんや本仏釈尊みずから、その仏果々上に、既に完

成されている娑婆即寂光といふ法華經本門の此の寂光土の事実さえ知ることなく、一切衆生悉有仮性自分なりの娑婆即寂光の図を画こうとするものです。

然し、それは独善的な、如何にまことの法華經の信仰は、日蓮大聖人の御指南の通り、本仏釈尊を本尊と仰ぎ、その因行果徳の二法である南無妙法蓮華經のお題目を但信口唱することによって、刹那にして娑婆即寂光土なる仏果々上に入り、その中にあつて法華一乘の菩薩道を行ひて行くのです。

この菩薩道を行ひて行く時、時

にもあらず、天に雲を呼び、地に花を咲かせる等々、一般人には奇蹟と思われる淨土の現証が、その人の周辺にあらわれて来るのです。但し、その菩薩道も、本仏果海中のものであるということは忘れてはなりません。

現証、それは、その人のみの力ではなく、本仏釈尊を中心として、囲繞する諸天善神の、擁護を誓願した法華經そのものゝ力なのです。繰り返して申しましよう。娑婆即寂光というのは、未來にあるものでもなく、また凡夫の不遜なる作為によつて可能とされるものでもなく、実は久遠の者から、本仏釈尊によつて、この地上に即して

既に完成され、未來永遠に變ることなく、如説修行者の足下に実在しているものであり、しかもそれは、觀念上の静止したものでなく大地より泉のふき出るが如き、爆流するような大生命力に躍動しているものです。

☆

日蓮大聖人は如説修行鉢の中です天下万民、諸衆一仏乗となつて、妙法ひとり繁盛せん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉れば、吹く風、枝をならさず、雨つちくれをくだかず、世は義慶の世となりて今生には不祥の災難を払い、長生の術を得、人法ともに不老

不死の理（ことわり）あらわれん時を御覽せよ。現世安穩の証文、疑いあるべからざるものなり

行の人々が、その國土に充满する時、國家成仏としての娑婆即寂光土が事相顯現し、世界全体に充满する時世界成仏としての娑婆即寂光土が事相に顯現するのです。

眼に見えない本仏果上の常寂光土、その実在を確信して、それを眼に見える現象世界の事相に顯現することこそ、日蓮大聖人の宣揚された法華經の信仰と申せましよ

う。

△おわり△



# 醒悟園本妙庵 釈尊像の入仏式

萬蜂会の行学根不這場である身延町波木井の醒悟園本妙庵に、昨年九月十六日、醒悟園の開創本妙日臨大和尚の祥月命日を期して、日蓮大聖人の御尊像入仏式が、身延山總務望月日雄上人の大導師によつて盛大にいとなまれたことは本誌上、既に紹介した通りですがその醒悟園に今度は、去る四月六日、久遠の本仏釈尊像の入仏式が

更に盛大にいとなまれました。

これによつて醒悟園の須弥壇には、十界の大マンダラの前に釈尊像その前に日蓮大聖人の御尊像を安置するという、本尊様式を整えることが出来たわけですが、今度勧請された釈尊像は、渡印の身延山金剛の釈尊像を铸造した京都の平安美術で譲製され、身延山本願人会大阪支部長岡本宗治氏によつて寄進されたものです。

その御尊容は、転法輪の印相をされた座像、高さ三尺、純金箔に輝いているのですが、原型はガングーラ出土の世界的名宝（紀元二世紀頃の作）を、現地よりセツコウで、そつくり鋳型にうつし取

つて来、その鋳型にもとづいて、お首から下をそのまま拡大、お顔は身延山金剛の釈尊像のお顔を参考として譲製されたものです。この仏像寄進の準備は、実は本年正月元日より始められ、四月一日、醒悟園の日高白象、小林白峰の両師が、大阪の岡本邸までお迎えに行き、身延山法主猊下によつて開眼され、入仏式の当日まで身延山祖師堂棲神閣の御宝前に安置しておられた。

入仏式の大法要は、四月六日の午後二時より開かれましたが、あえて此の日を選んだのは、曾つて文政三年の春、本妙日臨大和尚が

波木井山頂に醒悟園を開くと同時に、宗門史上「重乾遠の三師」と仰がれる名僧であつた身延山歴代一如院日重上人の開眼された釈尊像の入仏式を、釈尊降誕会の四月八日にいとなまれたという因縁にもとづいて、実は四月八日に举行する予定であったのですが、たまたま出席する仏像寄進者岡本宗治氏の都合もあつて、六日に改められたのでした。

然し、このため入仏式には、身延に集つた全国本願人会の中の有志が、山麓より八丁もある山坂をいとわず参列し、近郷近在の信徒

とあわせて、堂内は立派の余地もない盛大さでした。

因に参列された本願人の主な方は、東京三徳社長堀内貞良氏夫妻、同専務堀内寛二氏夫妻、博多の福岡県本願人会支部長藤田恵久氏、久留米の井上薰太郎氏、横浜の新川祥司氏、大坂の赤阪日孝女史等々で、法要後、それ／＼挨拶されました。が、わけても堀内社長が、身延山金剛の釈尊像のお供をして、インドの王舎城仏舎利塔の定礎式に参列した時の詳細な報告には、深く感動せざるを得ませんでした。

堀内氏は申されました。

「今や世界は、お經文の如く、釈尊に帰らねばならない時が来ました。釈尊の仏法、この法華經によらない限り、人類の救われる道はありません。如何に仏法をたゞえても、釈尊をないがしろにしていては、本末顛倒、遂には悪道をまぬがれることは出来ません。」

釈尊に帰れ、身延山金剛の釈尊像がインドの靈鷲山へ帰られたといふ今こそ、その時です。醒悟園の入仏式も、これにつらなるものとして慶賀に堪えません」

これに対して日高師は、次のように答えました。

「身延山金剛の釈尊像が、インドの王舎城へ渡つて、王舎城仏舎利塔の定礎式が、クリシナン・イン

ド大統領の列席のもとに挙行されたのは三月六日のことでした。

それより一月たつた四月六日の

此の日、釈尊の降誕会と共に、インドの宝像をかたどつた本仏釈尊像の入仏式を、身延の一角、惺悟園本妙庵において、いとなむことの出来たことは、不思議な仏縁と思われてなりません。

仏縁といえば、入仏式に遠路参列された方々は、みな靈峰会の街頭布教で、共に鑿鼓宣令された結果による人ばかりです。

靈峰会の使命は、インドの靈鷲山と、日本の身延山を法華經で結ぶことです。この誓願が仏意にかなうならば、如説修行する所、必ず成就することでしょう」

# 身延山青年行学講習会に参加して



中学一年 小 谷 宣 行

第七回身延山青年行学講習会が  
学生の春休みを利用して三月二十  
六日より二十九日まで三泊四日間  
身延山布教部主催のもと、身延山  
西谷の日蓮宗信行道場で開催され  
ました。

の感想文の中から、大阪市南区谷  
町妙経寺（住職西川友義師）の擅  
徒の令息である中学一年生小谷宣  
行君の感想文を紹介してみましょ  
う。

や顔や態度だった。それは真剣そ  
のもので、今まで旅行気分で来て  
いた自分自身が、とても恥しくな  
つた。

今回、講習会に参加した中で、

一番年上的人は四十才を越えてお  
り、最年少的人は十才だった。

## 感 想 文

集つた青年男女はおよそ七十名  
遠く秋田、福岡おらも駆せ参じて  
いました。

僕は今度はじめて身延山青年行  
学講習会に参加した。そして一番  
最初に感じたことは、みんなの目

参加資格は十六才から三十九才  
までの青年男女であつたが、僕は  
規定を破つてまでも参加する熱心

さは、大へん良いと思う。

三治四日間の講習中、七人の先

生によつて講義がされたが、最も

印象的だつたのは、

「創価学会の実体と今後の動向」

と題した石川泰道先生の講義だ

つた。僕は今まで、創価学会とは

どういうものなのか、また父か

ら、創価学会は悪い／＼と聞か

されていたが、どうして悪いのか

全く判らなかつたが、あの説教を

聞いて、今まで疑問だつたことが

大部分理解されて來た。次に、

「波乱の人生をつらぬいた不屈の

信仰」

と題した大阪の岡本宗治先生の

法話は、先生自身の生々しい体験

談であつたゞけに、非常に感銘が  
深かつた。

後で聞いたことだが、岡本先生  
は八才にして父を失い、十才にし  
て母を失い、貧困のどん底にあつ  
て、小学校へも行つていなかつた  
という。然し今は、岡本組という

大きな建設会社の会長さんであり

大阪ライオンズクラブの委員長や

身延山本願人会大阪支部長もして

おられ、この人こそ、人生の苦し

みと悲しみを、南無妙法蓮華經の

お題目の力で、つらぬいて来られ

た人物と思つた。

日高先生の講義は、

「唱題の意義と実践」

という題であつた。僕たちが日

頃、有難く思つて唱えているお題  
目は、どういう意味のものなの  
か、またどういうように唱えればよい  
のか、少しも判らなかつたことが  
この講義で大部分理解された。た  
ゞメモしていなかつたことが残念  
だつた。

次に奥之院思親閣へ登詣した感  
想を述べよう。出発に際して、講  
習生は一人／＼一尺三寸のウチワ  
太鼓をもつた。僕と十才の遠山仁  
君は、日高先生より戴いた一尺の  
ウチワ太鼓をたずさえた。

奥之院の山頂は、信行道場から  
少し行くと、直ぐそこに見える。  
全員一列縱隊にならび、太鼓をう  
ち、自信をもつて出発した。

ところが、その自信が大間違い

いよいよ気がした。

だつた。奥之院の参道は、傾斜が急でグル／＼廻つていた。大へん道のりが長い。然し、今さらやめるわけにもいかない。聞けば道のりは四十丁。思つたゞけでも嫌になつた。

参道の横の谷間にかゝつたロー

プウェイには、ゴンドラが楽しそうに登つていた。僕たちは、それを眺めながら太鼓をうつて、一步、流れる汗もぬぐわず、登つて行つた。

歩くのに自信のない者は、後に残つてケーブルで降りてもよい、ということだつたので十人ぐらいを眺めていた。僕たちがそうしようとした。

僕もその仲間の一人だつた。

二十五丁目の三光堂で、昼弁当を食べた。そこから奥之院が、手にとるように、よく見える。然し出發してから、いくばくも進んで

参道は、それからよ／＼けわしくなつた。息を切らせて、どうにか奥之院についた。こゝで御開帳をうけ、お題目を唱えてから、十分ばかり休憩したが、すぐ出發だつた。

歩くのに自信のない者は、後に残つてケーブルで降りてもよい、頑としてこばんだ。これには誰もが鼓舞激励させられた。然し僕たの少年は、大人に遅れないようになれないように、歯をくいしばつて、歩くだけで精一杯だつた。それには大鼓をうつて……。

途中、追分の茶店について、日高先共からの甘酒の御供養をうけてなるものか、と歩いた。

おんぶしきうとしたが、遠山君は頑としてこばんだ。これには誰もが鼓舞激励させられた。然し僕たの人たちがそうしようとした。

講習生の人たちが、かわる／＼おんぶしきうとしたが、遠山君は頑としてこばんだ。これには誰もが鼓舞激励させられた。然し僕たの人たちがそうしようとした。

僕もその仲間の一人だつた。

ところが本隊が、ドン／＼勇しく大鼓をうつて歩き出すと、残るうとした大部分の人たちも、思わず、つられて歩き出しに。僕も負けてなるものか、と歩いた。

高先共からの甘酒の御供養をうけてなるものか、と歩いた。

た時は天国だつた。

然し、帰りの下り道たは、さす

がに疲れ、何回か、ころびそうになつた。十才の遠山君は、ズック

がカカトに食いついて、血豆を出

し、ひっこを引きながら、それで

も大鼓をうつて歩いていた。

道場についたのは、もう夕暮れ  
だつたが、身分に打ち勝つた喜び  
は大きかつた。

次の日は、夜も明けぬ午前四時  
から五時まで一時間、御廟所の旧

草庵跡の石壇に正座し、太鼓をう  
つて唱題修行した。然し、この時  
の時間ほど長く思われたことはな  
かつた。足がしびれて感覚がなく  
なつた。

それでも、夜が白々と明けそめ  
る頃、日蓮聖人の御廟塔が、闇の  
中に白く浮び、何ともいえない莊  
厳な靈氣につゝまれた。

それが終ると、今度は本山で朝  
のお勤め、この時も一時間の正座  
泣きたいぐらい足が痛かつた。

講習会中は、本山のお勤め、道

場のお勤め、清掃、食事、講義と  
休む暇もなかつた。然し最後の日  
の講義の時は、とう／＼講堂から  
抜け出した。

あとは閉講式、この時も一時間  
の正座。これが終つた時、二度と  
講習会には参加すまいと思つた。

然し今、静かに後を振りかえり  
ながら、この感想文を書いている  
と、夏の講習会にも是非参加しよ  
うと思う。

参加資格の年令には、まだ／＼  
ほど遠いが、日蓮聖人のお弟子の  
中には、後に日像上人となつた経  
一層や、熊王丸という少年もいた  
はずだ。

## 賛助会員に贈る

鷲峰賛助会員の方々には、  
その御丹誠にむくる一端と

して三十九年度には、渡印の  
身延山金剛の釈尊像の写真を  
お送りしました。まだ受けと  
られていないお方には引きつ  
ゞいてお送りいたします。

次に四十年度の賛助会費御  
志納の方には醒悟園本妙庵  
に入仏勧請された釈尊像の全  
身写真をお送りいたします。

昨年度の賛助会員の方は  
もとより、新賛助会員の御支  
援をお願いいたします。

# 身延山学園児童研究部

## 秋田県下巡回布教紀行

身延山大学一年 小 田 泰 博

### 1

身延山大学・高校の学生有志によつて児童研究部が開足したのは昨年の春のことでした。

爾来、毎月のように身延町を中心として、山梨県下で子供会が催されました。

その目的は、一般大学の児童研

究と目的を同じくしながらも、更に子供たちに法華経信仰の種をうえつけ、その下種を通して、広宣流布の大願につらなろうとするものでした。

今年の春休み、学部三年の小川正夫君をリーダーとして、秋田県下の巡回布教が試みられました。

それは児研としては、初めての

他県進出でしたが、特に遠く秋田県下を選んだのは、小川君の出身地が秋田県であり、県下の事情に明く、何かと便宜であつたからでした。  
さて切角、秋田県まで出かけるならば、県下くまなく布教したいと思ひながらも、いざとなると、

身延山在院学生の休暇日数はあま



りにも少く、このため現地布教は

三月二十一日から二十三日までの

わずか三日間に短縮せざるを得ま

せんでした。

また従つて、参加する学生も、主として東北出身者に限定をよぎなくされてしまいました。メンバ一は次の八名です。

学部三年

小川正夫 宇野智謙 小原正男

学部一年

小田泰博 清水信和 河崎哲宏

高校三年

竹内俊介 藤田修造

なお布教材料としては

一、「日蓮大聖人の御一代記」と

題するカラースライド。

これは高三の竹内君が御一代記の図絵を撮影したもの。

二、身延山を紹介するため、同じく竹内君が自分で作製した「身

延山」と題するカラースライド

これは身延の駅から總門・山門

祖廟・本山諸堂・奥之院思親閣

から七面山まで撮映したもの。

三、身延山学生街頭布教の実況を紹介するため、昨年の夏休み、鷺峰会学生の主力となつた身延

山布教別動隊が、関西方面の街

頭布教を展開した時のカラース

ライド。

## 2

三月二十日、清水・河崎・竹内

の三名と私、以上四名は午後四時

十七分身延駅の列車に乗り込みま

した。他の小川・宇野・小原・藤

田の四名は、現地で合流すること

本、山高野山にまでも、擊鼓宣

令しながら立正安國を獅子吼す

る勇姿が撮影されました。

四、ヌイグルミをかぶつた児童劇

五、人形芝居

六、手品

七、童話・童謡

以上七つの教材が用意され、更

に寺院信徒のためには法話原稿も準備されました。

になつていきました。

富士、上野、秋田で乗りかえ最初の目的地である大曲駅についたのは、翌二十一日の午前八時五十分。春というのに、町には二メートルばかりの雪が積っていました。そこよりバスで約二十五分、バスを降りて歩くこと約十分にして仙北郡六郷町の本善寺につけば、住職平元義慈上人をはじめ数十名の檀信徒に迎えられ、さつそく本堂で小川隊長導師のもと法要一座。つづいて法話。次にスライド上映。

翌の三月二十二日の午前十時、この日、本善寺の幼稚園が休みであつたため、残念ながら児童劇で本善寺を出発。角館市の公民館へ向いました。

3

ライド布教を通して、身延山を本とする学生僧の活躍に、眼にハンカチをあてゝ感泣している熱心な檀信徒の姿に接し、却つて布教する私たちの方が感激させられたほどでした。

布教の終つたのは午後六時。日はとつぶり暮れていました。夕食後、反省会を開き、本善寺に一泊身延よりの旅の疲れを休ませて頂きました。

さつそく布教にかかりましたが子供たちが多いので、児童劇を中心、童話・手品・遊戯に・童謡をし、これに折りませながらスライドを上映。

この公民館は、市内の妙教寺住職阿部妙教上人の御斡旋で、一日私たちの布教のため貸り切つて頂いていたものでした。

午後一時、現地につければ、百名を超ゆる児童たちが、今が今かと私たちの到着を待ちわびていました。

このスライドを通して、身延山と街頭布教の実況を伝えながら、「みんな立派な人間になりましょう。立派な人間とは、恩を知つて

感謝の奉仕をする人です。まず親に孝行しましょう」

と語り、日蓮大聖人の御妙判、

「親は十人の子を養えども、子は一人の母をも養うことなし」

という有名な教えを伝えました

会が終了したのは午後四時三十

分でしたが、この間、はじめての

地方における、はじめて会つた多

くの子供たちを前にして、不安の

ため、はじめの中は、さすがに身

震いがとまらないほどでしたが、

やがて子供たちと、すっかり融け

あい、融けあうなかに、子供たちの歓喜する顔、その心、その動作

に接した時、今が今まで自信のかつた私たちには、この上もない

喜びと感激を覚えずにはおられませんでした。

そして、このことだけでも、は

る／＼秋田県までやつて来たことの意義を、しみ／＼と味わつたこ

とでした。

この日、妙教寺に一泊。夜おそ

くまで反省会をしましたが、外に

は、なお一メートルあまりも雪が

積つていました。

#### 4

##### 3、祈禱修法について

といつたようなことを種々語り

あい、檀信徒の御意見も聞き、私

たちも修行中の身ながら、それな

りの意見を述べて、尽きる時を知

らないほど、話しに花を咲かせま

した。

翌の三月二十三日は、もう今次布教の最終日。布教地は男鹿市船越の堺林院でした。

住職木名瀬寛明上人の御好意に

より、堀林院本堂で布教開始した

のは午後六時。終了したのは夜十時をすぎていきました。

この時集つた数十名の檀信徒のため、「日蓮大聖人の御一代記」「身延山」「街頭布教」のスライ

ドを上映。予期以上に喜ばれ、次いで一時間半に亘つて、檀信徒と座談会を開き、

##### 1、法華経の絶力

##### 2、靈魂問題

なお、この座談会を通して、檀

る。

信徒のもつてゐる信仰、並に宗教家に期待している所の一斑をうかがうことが出来、ます／＼行学の二道を勵まねばならない急務に、身のひきしめる惡いを禁せられなかつたことでした。

この日、幾本院に一泊。今教最終の夜を明しました。

5

翌三月二十四日、児研布教隊は現地で解散しましたが、今回の布教を通して感心したことは、一、世の大衆は、眞実の信仰を説く宗教家の出現を、あたかも千天に吉雨を待つが如くに渴望してい

新興宗教や、誤れる宗教が跋扈するのは、大衆の無知のせいではなく、眞実の宗教を説く人が、その勇気と奉仕の心を持つた宗教家が、あまりにも乏しいからだ。

二、布教は、子供たちに対しても大人の人々に対しても、常に精神であり、且つ真剣でなければならぬ。そうした布教者の新進たる態度こそ、大衆の心を打ち、やり動かすものだ。

三、広宣流布の道は遠い。然し創意と工夫をこらした地道な布教、それは紙上にぎやかすハデなものでなくとも、水の大地にしみ通るが如く、木の根の地中にはびこ

るが如くに浸透して行く。成果は直す頼われなくとも、何時かは、必ず何時かは、たしかに広布の基盤となつて行く。

私たち学生布教は、教材も旅費もすべて自己負担でした。それは

鷲峰会の街頭布教や鷲峰誌の発行と同様ですが、誰にも依存せず、みずから生み出す努力の中に、私たちみずから練成されて行くことを信じ、近き将来を期して、一步

一步と青年運動を展開し、築き上げて行く決意を新たにしたことでした。

△おわり△

## 編集後記

★身延山大学高校の春休みを利用して三月十一日より十三日までの八尾市安国寺における行学講習会十四日の布施市・十五日の三田市十六日の福知山市における連日長馳した街頭布教の模様、ならびに連載中の信仰相談室「本仏信仰と祖先崇拜」に関する続篇の解説は掲載紙数の都合により次号へ廻させて頂きます。

まことに、やむを得ざる事情のためとはいえ、四月号の発行が余りも遅延しましたことは、幾重にもお詫びいたします。

鷲峰——四月号

昭和四十年通卷第三卷第四号  
第二十二号

定価五十円 送料十円

昭和四十年三月二十日印刷  
昭和四十年四月一日発行

編集兼发行人

山梨県身延町波木井 醒悟園本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

発行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰会

振替(甲府)二〇九三番

誌代	半年分	三〇〇円	送料	六〇円
一年分	六〇〇円	送料	一〇〇円	
一年分	三〇〇〇円	(分納可)		

賛助会費